

とつの収穫であった。

さらに本書は、気象データの統計解析を理論的に進める際の手引きとしても役立つ。また、実例を使った検討例も豊富で、いかにしてデータに語らせるかという解析過程を学ぶためにも役に立つ。たまには、ブラッ

クボックス化している統計技法の中身を覗くことも必要であろう。駆け足で通読したが、時間をかけて味読したいと考えている。

(気象庁統計室 小柴 厚)



「環境アグロ情報 ハンドブック」

山口武則, 山川修治, 大浦典子共著

1998年, 古今書院

A5判, 258頁, 定価3800円

全10章のうち7章まで、ページ数の約半分が農学そのものと環境との関わりに終始し、気象学に携わる者にとって、一見、専門外にうつるであろう。しかし、環境保全対策を積極的に取り入れる現在の農業（アグリカルチャー）および農業気象学（アグロメテオロロジー）などのあり方に関して、大気の科学に携わる者にも有益な情報が満載されている。

気象も含めその土地土地の風土を上手に生かした伝統的な農業のあり方とその見直しなど、自然環境にやさしい昔の人の知恵を改めて学ぶ上で、興味あるテーマが多く扱われている。例えば、輪作農業とか落葉利用、家畜糞尿のリサイクル、木炭・木酢やミミズによる土壌改良、アイガモ農法など。また、第V章の雪の利用の一部では、先人の知恵の1つである氷室やカマクラの発想を再現したものを扱っている。

さて、本書の圧巻は第VIII～IX章であろう。エネルギー問題が省エネ・省資源・環境保全の立場から記述され

ている。特に、太陽や風のエネルギーに関しては、著者（山川）自身が撮影した豊富な写真と収集した図などで分かりやすく解説してある。第IX章の41～47節は、各節において地上天気図や、時には高層天気図（北半球天気図）も添付して、農業に關係する気象災害とその対策を論じている。天気図の解説はそのまま農業などにとって有用な天気予報とか、異常気象による災害のための予報にも使えるような気配りがされている。適材適所の事例紹介は、著者（山川）の豊富な文献解説・資料収集によるところ大である。農業気象に関しては、昨今問題となっている地球温暖化とその土地の気候・土壌・水文との関連にも触れている。そのほか、酸性雨・オゾン層破壊などの農林業への影響、リモートセンシング情報の活用法、国内外の農業環境情報入手のためのインターネット紹介など、読者へのサービスは至れり尽くせりである。さりげなく余白を埋めている囲み記事「トピックス」や巻末の索引を兼ねた用語解説も貴重な情報提供となっている。

なお、全10章で図が84枚、表は34表そして写真は106葉も使用されており、見るハンドブック・楽しく読ませるハンドブックとなっている。座右に備えておいて、きつと役立つハンドブックであると確信している。

(立正大学地球環境科学部 福岡義隆)